

## 環境対策に貢献する電磁ボイラー「エレワ」

有限会社 ジー・エフ・シー  
代表取締役社長 五勝出 和寿

有限会社ジー・エフ・シーは平成5年に設立し、公共施設のリフォームを本業としてスタートしました。リフォームをいろいろ手掛けているうちに、環境対策への関心が強くなり、お客様の要望もあって、化石燃料でなく、商用電源を効率的に使う電極式ボイラーを開発したのです。



電磁ボイラー「エレワ」

これを電磁ボイラー「エレワ」という商品名をつけて平成21年5月インテックス大阪で開かれた中小企業総合展に出品したところ、ATACに関心を持たれ、それ以来このボイラーに関する課題解

決にATACの協力を得て各種の用途に適応する開発を進めてきました。

その結果、温水器・蒸気発生器の両面で農家のハウス栽培、食品製造、温泉水の温度調整、高温蒸気による清掃など、多方面から多くの引き合いが来るようになり、CO<sub>2</sub>を排出しない環境対策に貢献する新方式のボイラーとして、今後販路を拡大したいと考えています。



有限会社 ジー・エフ・シー  
〒709-2131 岡山市北区御津鹿瀬190  
TEL:0867-24-9275  
FAX:0867-24-9276

### その7「品質管理 - 改めて品質の評価を誰がするのかを考える - 」

昨年、米国でレクサスのアクセルペダルが原因とみられる死亡事故発生以来、次々にトヨタ車の品質問題が出てきました。

日本の製造業を代表するトヨタであっただけに、多くの日本人は日本の製造業の信頼が揺らいでいるよう感じたのではないのでしょうか。

第2次世界大戦後、日本製とは安かろう悪かろうの代名詞でさえありましたが、1950年のデミング博士の来日を契機に日本の企業は「統計的手法」を使った「品質管理」を学び、脱粗悪品を目指しました。

品質管理はQuality Controlの訳で、本来の意味は「品質制御」ですが、日本では「品質を管理する」と解釈し、トップから従業員まで「良い品質作り」に取り組みました。科学的手法を学び、品質保証や問題解決法に工夫を凝らし、全員参加のQCサークルや、トップの指揮の元全社で品質改善に取り組む「TQM」を展開し、日本製品が世界を席巻するようになりました。

しかし、長期にわたる日本の経済の停滞により、生き残るための合理化がモノづくり力を弱め、その結果品質の優位性が失われる悪循環に陥ってしまいました。

モノづくりの競争力指標である、Q・C・DのうちQがあってはじめてCやDが意味を持ちますが、このQが大きく低下しているのです。

物不足の時代には、製品やサービスの提供者が「自分たちが決めた規格が満たされているか」が品質の評価であったものが、十分に物が行き渡る時代、「規格が顧客に受け入れられているか」へ、更に「顧客だけでなく環境や社会に受け入れられているか」へと、Qへの要求が高くなってきました。

トヨタ車の問題で、経営者の方々は改めて「顧客が品質の評価をする」ことを再認識されたのではないのでしょうか。

経済のグローバル化が進む中、更に製品に付加価値をつけるモノづくり力が重要であり、「顧客や社会の要求を的確に把握し、それを設計に取込み、設計の狙い通りの製品を作り上げる」品質管理の役割が不可欠です。

ATACは、日本の品質管理の歩みとともにモノづくりに携わり、品質向上を担ってきた技術者集団です。品質問題の解消のための「目からウロコの支援」、更に「次代のモノづくりを担う人材の育成」に、是非ATACをご活用下さい。  
(長田記)